

安岡正篤の東洋宰相論——「万世の為に太平を開く」

田 中 学

要旨 安岡正篤は、在野の思想家でありながら、戦前、戦中、戦後と、政財界を牽引する多くのリーダーたちに大きなインパクトを与えた人物である。戦前は金鶏学院や日本農士学校を設立し人材育成に努め、戦時中の小磯昭内閣では大東亜省顧問に就任し、終戦を告げる昭和天皇の「終戦の詔書」の刪修にも関わり、その中に「萬世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」との一文を加えた。戦後の一時期は公職追放の憂き目に遭いながらも、解除後は師友会、後の全国師友協会を設立し、講演や執筆、様々な勉強会の講師を務め、精力的に啓蒙活動に取り組んだ。他方、吉田茂、岸信介、佐藤栄作、福田赳夫、大平正芳といった歴代首相の指南役として大きな政治的影響力を持った。張横渠は一一世紀の宗王朝の官吏であり、儒学が成熟した時代を代表する思想家でもある。安岡が「終戦の詔書」に入れた言葉は、張横渠の有名な「天地の為に心を立つ、生民の為に命を立つ、往聖の為に絶学を継ぐ、万世の為に大平を開く」という四言教から引用されている。安岡が遺した多くの著作においても、この言葉が頻繁に登場する。安岡にとって重要な言葉だったことが分かる。そこで本稿では、安岡の歩みとその学問的特徴、戦後政財界のリーダーたちに、どのような助言を行なったかについて述べた上で、安岡の理想とした宰相像を張横渠の言葉から紐解いていく。

キーワード…安岡正篤、張横渠、陽明学、曾國藩、郷学

はじめに

安岡正篤は、東洋哲学の泰斗であり、戦前から戦中、そして戦後の政財界における思想的指導者として名を馳せた。「終戦の詔書」の起草にも携わり、多くの政治家、財界人が師と仰ぐ人望と功労を残した。

だが、他方で「昭和を操った『陰の男』」や「戦後日本の保守政界の黒幕」、あるいは「戦後の反動イデオロギーの『旗手』」と揶揄する向きもある。その原因として人口に膾炙されているのは、安岡自身、政財界、あるいは官僚や軍人との豊富な人脈を有しながら、彼らに助言することはあっても、決して表舞台に立つことなく、側近にも自らの功績を口にするともなかつたため、存在そのものがベールに包まれているからである。

安岡をテーマとする書物の大半は、安岡の直弟子や私淑する実業家、作家によって書かれたものばかりである。特に元号「平成」の考案者ではないかと噂され再び脚光を浴びた頃に出された神渡良平の『安岡正篤の世界——先賢の風を慕う』（同信社、一九九一年）や、塩田潮の『昭和の教祖——安岡正篤』（文藝春秋、一九九一年）が有名である。別の著者による著作・論文では、満州事変や支那事変といった日本の中国進出に賛同していたかのような事実と異なる前提で論述したものが目立ち、安岡の深淵な思想・哲学が十分に掘り下げられているとは言い難い。本論では、安岡の歩みと学問的特徴、政治家や実業家への指導や交流について述べた上で、安岡の理想とした宰相像を張横渠の格言「万世の為に太平を開く」から紐解いて検証したい。

張横渠は一一世紀の中国宗王朝時代の官吏、思想家でもある。儒教や老荘思想、仏教、易学を学んだ後、進士に及第し中央政府に出仕する。しかし、時の宰相と意見が合わずに帰郷することとなり、後半生は講学と郷党の指導に費

やし世に超然と処した人物である。

その思想は、安岡が影響を受けた王陽明や日本の陽明学者である中江藤樹と大塩平八郎にも大きなインパクトを与えている。張横渠の「天地の為に心を立つ、生民の為に命を立つ、往聖の為に絶学を継ぐ、万世の為に大平を開く」を含む四言教に込められた意味は、張横渠の見識や卓見を表すのみならず、「終戦の詔書」においても、この言葉を入れた安岡という稀代の思想家の生き方そのものを表していると言えよう。

一 安岡の生涯

安岡正篤は一八九八年二月一日、商売を営む堀田喜一の四男として大阪府大阪市中央区旧順慶町で生を受けた。堀田家は南朝の勤皇家で、文人墨客の出入りも多かったという。遠い祖先には南朝の忠臣として四条畷の戦いにおいて楠木正行と討死し、四条畷神社に合祀されている堀田弥五郎正泰がいる。そんな家庭で育ったためか、世間一般の教育方針とも異なり、当時においても珍しい四書五経、漢詩を始めとする中国古典に加え、日本の古典教育も受けている。

指導に当たったのは堀田家の近所にある春日神社の神官だった浅見晏斎である。浅見は国学や漢学に造詣が深く、安岡の明晰さに惚れ込み様々な古典教育を教授した。安岡は浅見の下で、漢籍、和籍に登場する聖人の知恵、英雄の功労と、公立の学校では学び得ることのない知見を磨いた。

安岡は地元の旧制四條畷中学でも非常に成績優秀ではあったが、堀田家の財政事情から進学する余裕がなかった。そんな中、四條畷中学で音楽と漢文を指導していた教師の島長大から、当時、東京に出て日本通運の取締役を務めていた安岡盛治を紹介される。もともと土佐の資産家だった安岡家には婦美という娘がいたが、家を継ぐべき男子がいなかった。盛治は有為の青年がいれば、婿養子として迎えたいと考えていたのである。幸いにも安岡家は東京にあり、

堀田家は、これを了承した。

こうして安岡家の養子となり、一九一六年春、第一高等学校第一部丙類（独法科）に首席で合格、上京を果たした。しかし、東洋政治学を志す安岡にとつて、欧米で発達した近代政治学や哲学は、自身が志向する学問とは大きく異なっていた。心の修養と切り離された知性、知識偏重の授業に安岡は大きく失望しノイローゼの状態に陥るも、幼少から慣れ親しんだ古典への回帰によって心の安寧を取り戻す。

第一高等学校卒業後、安岡は東京帝国大学法学部政治学科に入学する。安岡と同時期に東京帝国大学で学んでいた元獨協医科大学学長の磯田仙三郎によると、「かの吉野作造先生が安岡を評して、東大では前代未聞の秀才だ」といったそうです。もう大学の四年の頃にはほとんど授業には出ず、試験だけは受けに行つた。教わることがなくて教授に教えるほどの珍しい秀才だった」という。³⁾

そして安岡は、東洋哲学を中心とした言論活動を始めた。東京帝国大学の学術誌である『帝国文学』に「蘇東坡の生涯と其人格」を寄稿したのを皮切りに数多くの論文を執筆し、それらは隣り間に各方面から注目を浴びるようになり、中国の学者から東京帝国大学の教授と間違えられたこともあったという。⁴⁾ この論文を通じて沼波武夫と知り合った安岡は、そこから正岡子規の高弟である寒川鼠骨や、北一輝、大川周明、満川亀太郎といった思想家とも交流するようになる。

大学在学中の一九二二年三月、卒業記念として執筆した『王陽明研究』が出版され、大きな反響を得る。安岡が後年、「陽明学者」として見做されるようになったのも、この著作の影響が強い。卒業に際しては法学部長の上杉慎吉より、自分の講座の後を継ぐよう勧められたが、安岡は「学究の道よりも、実践に入つて人を育てるのが私の使命」として丁重に断っている。⁵⁾

卒業後、安岡は文部省に奉職するも半年で退官する。当時は大正デモクラシーと呼ばれる民本主義、西洋哲学的な思想が全盛の頃だった。だが、安岡は逆に儒教や日本の伝統的な思想を中心とした先哲の学問を追求することによって、自己修養、あるいは日本国民の啓蒙を行っていく在野の思想家・教育者として独自の歩みを始めた。

間もなく貴族院議員の酒井忠正邸内に東洋思想研究所を設立、そこから数多くの論文を発表し、一九二三年には皇居本丸にある社会教育研究所で東洋哲学の講義を担当して、宮内大臣だった牧野伸顕を始め、現役将校たちの多くが安岡の講義を受けた。これにより安岡の人脈は格段に広がっていく。社会教育研究所は一九二五年に「大学寮」と改名されるが、これは安岡が四書五経の『大学』に因んで命名したものであった。

一方、当時、同じ社会教育研究所の講師であった大川や北と一緒になって、暁鐘を撞いて国家民族の覚醒を促すべく、政治運動にも身を投じたこともあった。しかし、それより個人の修養、人物の養成が根本になければならないという信念の下、間もなく表立った政治活動からは離れている。

一九二六年、安岡は拓殖大学の教壇に立ち、「東洋民族心理研究」を担当、翌年には東京都文京区の酒井邸内にある金鶏庭園内に金鶏学院を創立し、江戸時代に全国各地で開かれた私塾をモデルに、政治指導者を目指す受講者に精神教育を行った。この金鶏学院の卒業生には後に衆議院議員となる林大幹がいる。

しかし、当時の日本は、昭和維新と呼ばれる軍部の若手将校や、右翼・左翼活動家の過激な事件が後を絶たなかった時代である。後に血盟団事件に関与する人物もいたが、政治家、軍人、官僚たちの注目度は高く、青年官僚の広田弘毅、貴族院議員の近衛文麿、軍人の荒木貞夫も頻繁に顔を見せた。そのような環境の中で安岡は、金鶏学院に集まってきた血気盛んな若者たちに次のように説いた。

私は諸君に新選組をも、天誅組をも、公武合体運動をも望みません。私は諸君が竹内式部たり、山縣大貳たり、春日潜庵たり、高橋泥舟たり、池田草庵たり、若しくは二宮尊徳足ることを望むものであります。治乱興亡は一時のことでありませぬ。学問道徳は永遠のことでありませぬ。(中略)私の素志はむしろ、張横渠の所謂「天地の為に心を立つ、生民の為に命を立つ、往聖の為に絶学を継ぐ、萬世の為に太平を開く」の徒たらんとするに存するにあります。

学問求道の先人達の名前や、張横渠の四言教を例に、暴力革命の無意味さを説いて聞かせたのである。

一九三一年、農村、地方のリーダーを育てるべく、安岡は埼玉県比企郡菅谷村に日本農士学校を開校した。農作業や生産加工の実習といった実学に加え、東洋哲学や歴史、武道や音楽など幅広い分野を二年間学ぶユニークな学校であった。安岡は後に「私がやったことの中で、これだけは意義があったと自信を持って言えるのは、日本農士学校をつくったことだった」とし、続けて「自分自身のためにもどれほどためになったかわからない」と述べている。革命や昭和維新が叫ばれる時代において、都会の喧騒から離れた武蔵の地で、人材育成に力を入れた日本農士学校時代が、安岡にとって最も幸福な時代だったのである。

一九四四年に旧知の小磯国昭が首相に就任すると、安岡は請われて首相顧問並びに大東亜省顧問となる。小磯や大東亜大臣兼外務大臣の重光葵に対して日常的に助言を与えていたとされ、この時期に中華民国の蒋介石との交渉に関与していたことが、戦後に戦犯リストから外れた遠因になったとも考えられる。

そして一九四五年八月一五日、安岡は昭和天皇の「終戦の詔書」の刪修にも関わった。その中に安岡は「義命ノ存スル所」と「万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」いう文言を入れるも、「義命」は分かり難いとの意見が出たため、幾度

かの修正を経て「時運の赴く所」に訂正されたという。後年、安岡は自らの講演で、自分が修正した箇所とその真意について説明し、そのうち最も重要な部分が、安岡の意に反して再び変更されてしまったことを「終生の恨事」であると語っている⁽⁸⁾。

戦争が終わって間もなく、日本は約六年半余に亘り、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の占領統治下に置かれた。そして一九四六年五月より、連合国が「戦争犯罪人」として指定した日本人を被告とする極東国際軍事裁判（東京裁判）が行われる。A級戦犯として訴追される面々の中には、安岡の名前も入っていた。

だが、しばらくして安岡は戦犯容疑者リストから外されることになる。水面下で動いたのは蒋介石だった。中華民国情報長官の王大楨からの連絡を受けた蒋介石が、「安岡ほどの碩学を戦犯指名するのはまったくのまちがいだ」と考え、アメリカを説得したという⁽⁹⁾。

ただ、安岡は訴追こそ免れたもののGHQによって公職追放の身となり、金鶏学院は閉鎖され日本農士学校からも離れることとなった。数年ではあるが雌伏の時を迎えることになる。そして、公職追放が解かれると、一九四九年に全国師友協会を設立、講演や執筆、様々な勉強会の講師を務め、精力的に啓蒙活動を再開していくことになった。

それ以降、政財界のリーダーたちは、挙って安岡の教えを請うようになった。政治家では吉田茂、岸信介、池田勇人、佐藤栄作、福田赳夫、大平正芳、実業家では住友生命の新井正明、クボタの廣慶太郎、コスモ証券の豊田良平、ウシオ電機の牛尾治郎と錚々たる人々が安岡の下に集った。松下電器創業者の松下幸之助が一九七九年に松下政経塾を設立したのは安岡の勧めもあつたとも言われ、開塾後は顧問に就任し、一年目には講師として塾生に指導している。

戦後日本政治史のターニングポイントとなるような場面でも、安岡は折に触れて政治家たちに助言を与えていたとされる。日米安保条約改定、沖縄返還、日中国交正常化といった日本外交の重大案件を処理する際にも、安岡は時の

首相からアドバイスを求められ、各種演説・スピーチ、親書の草稿に筆を加えることもあった。しかし、安岡は決して表舞台に立とうとはせず、マス・メディアからの取材も、ほとんど受けることはなかった。

一九八三年一月二三日、安岡は心不全のため八五歳で、この世を去った。当時、首相だった中曽根康弘は「戦前戦後を通じて日本の思想界に非常に影響を与えた方で、歴代首相も先生に教えをこうた。(中略)混乱したこの世の中に東洋哲学をもって政財界を指導された巨星を失い、誠に残念で悲しみにたえない」とのコメントを寄せた。¹⁰⁾さらに元首相の福田赳夫は「戦時中にお目にかかる機会を得てからこれまで四十年間の門弟として、何かあるごとにご支援をいただいた」と述べ、その逝去を悼んだ。

一九九〇年代には元号「平成」の考案者と囁かれ再び注目が集まり、安岡の死後も各種雑誌で特集が組まれ、関連する出版物も数多く刊行され続けている。戦前、戦中、戦後と、政財界の大物との交流を持ちながらも社会的地位や富、名声を求めるでもなく、立場を越えて教えを請う人々に対して安岡は真摯に対応し続けた。無位無冠の在野の思想家・教育者でありながらも、各界指導者を感化させる稀有な影響力を持った人物であったと言える。

二 安岡と古典

安岡正篤の思想と哲学の原体験は、大阪の少年時代に四書五経の素読を始めとした古典教育によるところが大きい。古代中国の儒学者・孔子を祖とする儒教の教えを、宋の時代の儒学者・朱熹は、『論語』『孟子』『大学』『中庸』の四冊の書と、『詩経』『書経』『礼記』『易経』『春秋』の五つの經典は、儒教を学ぶ上で習得すべき必読書「四書五経」として体系化したものである。

中国歴代王朝の官僚の登用試験である科擧では、この四書五経の約四十万語に及ぶ文章の全てを暗記することが求められた。日本でも江戸時代中期の老中・松平定信の寛政の改革によって朱子学が重要視され、日本全国の藩校や寺小屋、私塾で四書五経が教育の中心に据えられてきた。この儒学を重んじる幕府の教育政策の影響により、四書五経は江戸時代に生まれた日本人にとって馴染みのある経書となった。

安岡も小学生の頃には『大学』を暗唱し、この四書五経を中心とした古典教育が安岡の人格形成、そして、その生涯に大きな影響を与えることになる。その儒教の最大の特長は「修己治人の学」ということである。自己修養（善行）によって徳を積み、その徳を以て人を感化させ人を治めていく。これが儒教の根本思想とする夏・商・周時代の政治指導者（君子）に近づくための学問が儒教であるとも言える。

安岡は第一高等学校在学中にノイローゼとなり、その状態を少年時代から馴染みのあった古典を学び直すことで精神を回復させることになるのだが、安岡の思想と哲学を考える上で、この出来事は極めて重要な意味を持つ。なぜなら東洋政治学を志す安岡にとって、欧州で発達した政治学や哲学は、自身が志向する学問とは大きく異なり、本当の学問とは何かを悟るきっかけにもなったからである。当時の心の葛藤について、安岡は以下のように述べている。

新しい学校生活に慣れた僕は、その頃から堪らない寂寞を感じだした。一番痛切に意識したのは、いわゆる一
 高校生の案外浅薄な虚偽生活と、僕の想像に反して意外に先生たちに人格者に少ないことであった。⁽¹²⁾

心の修養と切り離された知性、知識偏重の授業に安岡は大きく失望したのであった。さらに、こう述懐する。

あまりにも違うのです。今までやってきた『論語』『孟子』『大学』『中庸』あるいは『日本外史』『太平記』などというものと。田舎出の私には面食らうことばかりです。それまで読んだものはとにかく仁義・道徳・忠君愛国のことばかり書いてあった。ところが高等学校に入ると、反対のことばかり書いてある。みな仁義道徳だの、忠君愛国だのというものに疑問を持って、何か人間の悪というものを研究し、それを描写して、従来の人間観、国家間というようなものをごとく打破する書物ばかりであった。(中略)そういうことをやっておるうちに、一つの大きな煩悶が起こってきた。やればやる程なんだか淋しくなる、もどかしくなる、じれったくなる、居ても立ってもおられないくなる。今日の言葉でいえばノイローゼ、その頃は神経衰弱という言葉が流行っていました、¹⁵ どうもその神経衰弱になる傾向がある。

そこで安岡は先哲を求め図書館へ通い、かつての師である浅見晏齋が安岡に施したような古典教育に回帰していくことになった。第一高等学校入学以来、煩悶としていた感情が、『論語』や『孟子』、王陽明の『伝習録』や『太平記』、大塩平中斎(平八郎)の『洗心洞劄記』、さらには松下村塾を主宰した吉田松陰の著作といった賢人の書を愛読することによって心の安寧を取り戻し、疑問に感じていた西洋式学問にも正面から向き合えるようになる。そして後年になって、なぜそのような状況になったかを、安岡はこのように述べている。

　　いったい、なぜ西洋近代の哲学だとか、社会思想だとかいうものをやっておると、人間がなんだか寂しくなったり、もどかしくなったり、あるいは神経衰弱気味になったりするの。これにはいろいろ理由があるが、第一に気のついたことは、これは知性の学問であるということです。つまり知識の、抽象的な、概念と論理の学問で

あるということです。⁽¹⁴⁾

幼少期から求道的な学問をしてきた安岡にとって、知識偏重の近代教育は精神衛生上、好ましいものではなかった。安岡が考える学問とは、人格を陶冶し人間性を善きものに変えていくための手段であり、学科の点数や、学業での成績によって立身出世を諮るようなものではなく、戦後の日本で確立されていく偏差値教育などは安岡が志向する学問とは最も程遠いものであった。中学校の授業も休みがちだった安岡にとって、高等学校や従来の学校教育は、安岡の学問への欲求を満たすものではなかったであろう。

こうして安岡は古典教育に回帰していくことで精神の安定を取り戻し、学校での知識の学問に対しても真摯に取り組めるようになったのである。このように自己修養や人格は安岡の政治哲学を考える上で重要な観点であると言える。

三 歴代首相の指南役として

(一) 吉田茂と三木武吉

戦後日本の復興を担うこととなった吉田茂とは、吉田の岳父であり宮内大臣を歴任した牧野伸顕を介して知り合った。牧野と安岡正篤の出会いには安岡の学生時代にまで遡り、終生、安岡との親交が絶えなかった。そんな牧野が敬愛した安岡を吉田は「老師」と呼び、折を見ては安岡と会談の場を設けている。

講和条約及び日米安保条約を批准した際に、一部、世間からの強い批判を受けることとなるが、安岡は「吉田は使命を達観しているよ、徒らな世論に支配されることはない」と語っている。⁽¹⁵⁾ 吉田が政界を引退した後も、その交流は

絶えることがなかった。

一九五五年の日本民主党と自由党による保守合同の立役者の一人である三木武吉は、安岡からの評価が高い人物である。三木は戦前からの党人政治家で、公職追放が解除されると政界復帰し、反吉田の急先鋒となって政局の中心にいた人物であった。安岡と親しい関係であった吉田と激しく対立していたにも関わらず、安岡は三木の政治家としての才覚を高く評価している。

二人の出会いは一九五二年六月、当時、自由党の総務会長だった三木に招かれ懇談したのが最初である。安岡の三木に対する印象は「その姿、鶴骨松容、氣宇凡ならず、巷間の噂に違えり」であったという⁽¹⁶⁾。そして一九五三年一月、吉田による「バカヤロ―発言」によって、内閣不信任決議案が可決され衆議院解散、総選挙が行われ、この結果、自由党は単独過半数を割り、自由党内の反吉田勢力が党内を割ろうかという混乱の時期にも、安岡は事態收拾のため様々な政治家と会っているが、その時の一人が三木であった。三木は「我が心鳩山に非ず、ひたすら政局の安定にあり。保守合同こそ願ひである」と安岡に真意を伝えている⁽¹⁷⁾。

安岡は「三木を凌駕する政治家はいないだろう」⁽¹⁸⁾、「蘇秦、張儀の概あり」と評している。蘇秦と張儀は古代中国の春秋戦国時代における縦横家（外交家）の代表格で、三木の緻密な戦略家の部分と豪放磊落な人格を蘇秦と張儀に重ね合わせていたようである。

(二) 宏池会と大平正芳

池田勇人によって作られた自民党の名門派閥「宏池会」の命名者も安岡正篤である。語源は『後漢書』馬融伝にある「高光の樹に休息し以て宏池に臨む（高光という宮殿の台に休息して広大な池に臨む）」からきている。馬融は字徳

が高く、門弟も数多く抱え人材育成に努めた人物である。安岡は池田に「宏池の池は池田の池にも通じます。この会は池田先生の徳を慕って集まったのですから、馬融の故事から会の名前を採るのがふさわしいでしょう」と述べ、この説明を聞いて、「もったいないほどの名前だ」と思い「宏池会」に決定したという。²⁰⁾

池田の後に宏池会を率いた政界一の読書家でもあった大平正芳も安岡の信奉者である。安岡は、大平とアメリカのカーターが会談の際に、「日米パートナーシップ論」を強調したことを立派な見識と評価し、それを聞いた大平は「安岡先生と話していると心が洗われる気がします。確信が湧いて心が決まるのです。(中略)世に出てからは安岡先生の書を読んで、自分という人間ができた様に思います」と語っている。²¹⁾

晩年の大平が、よく色紙に書いたのが「任怨、文謗」という言葉であった。言うまでもなく、これは元の張養浩の名著『三事忠告』にある「廟堂忠告」の言葉である。²²⁾ そんな大平が選挙中に亡くなった際には「物事を根本において捉えようとした人で、読書が身になっていました。(中略)六年間は内閣をやってもらいたかったが、残念です」と、安岡は大平の死を惜しんだ。²³⁾

(三) 岸信介と佐藤栄作

岸信介と安岡正篤は同じ第一高等学校を首席で入学し、東京帝国大学に進学してからは、年代こそ違いが同じ上杉慎吉のゼミナールに所属するなど共通点も多かった。岸は安岡逝去の際は葬儀委員長も務めている。そんな岸と弟の佐藤栄作との出会いは戦前に遡る。兄弟の母方の叔父で、医師・池上作三の紹介であった。戦後に岸内閣が発足した一九五八年、共産主義の脅威に対抗するために新日本協議会を結成した際には、安岡も協力している。

戦後における歴代首相の指南役と呼ばれた安岡だが、その中でも特に安岡を慕う佐藤との関係性は強い。佐藤が首

相になる前には世田谷の自宅に安岡が来訪し、長時間に亘って話し込むことも頻繁にあったという。

そして佐藤内閣における施政方針演説の原稿は、全て安岡の校閲が入っている。佐藤夫人の寛子は「七年八ヶ月の総理在任中、施政方針演説、初診方針演説だけでも二二回行っていますが、そのすべてを安岡先生にみてもらったそうです。でも、先生は政策上の問題で意見を述べられたことは一度もなくて、あくまで文章上の表現で朱筆が数カ所入るだけだったとのこと」と証言している。²⁴⁾

首相としての施政方針演説などは、草稿を秘書官の楠田實さんが白山の先生の屋敷にお持ちし、必ずチェックをお願いしていました。また先生の方からすすんでアドバイスを授けられることも再三でした。皇居の新宮殿の落成式で昭和天皇にお祝いを述べるときの言葉や、ノーベル賞の授賞式における演説などは、先生自らのアドバイスが反映されています。年末ともなりますと、父は来年の干支から政局の展開も占ってもらったりしていました。²⁵⁾

これは佐藤の長男・龍太郎の回想である。佐藤がノーベル平和賞を受賞した際のスピーチ原稿は梅棹忠夫、高坂正堯、山崎正和、京極純一といった佐藤内閣のブレーンによって作成されたのだが、その際に佐藤が「安岡先生からこういうメモを頂戴している。これはやはり入れてほしい」と言ったため、「冒頭の国民の代表としてもらうということとか、聖徳太子の『和を以て貴しなす』ということ」が書かれたという。²⁶⁾ このように佐藤長期政権の裏には安岡の精神的な支えがあった。その佐藤の政治手法は「待ちの政治」とも称されたが、その政治姿勢の真髓を端的に表したのが「啐啄動機」である。

卵が孵化して雛がかえるとき、中からコツコツと殻をつついて外の親鳥に知らせる。それが『啐』です。親鳥はその合図に間髪入れず、外からくちばしでつついて殻を割ってやる。これが『琢』。啐と琢が内外同時でない、うまく孵化できません。つまり物事には微妙な機があり、それを見極めて行動しなければならぬということ(27)です。

こうして安岡の指導を受けた佐藤内閣は、長期政権を築き、日韓基本条約の締結、公害対策と環境庁を設置、小笠原諸島返還や沖繩返還といった多くの成果を残していった。佐藤は首相退任後、間もなく鬼籍に入るが、佐藤の三回忌である一九七七年に、安岡による墓碑銘が入れられることになった。

昭和五十年六月三日、國老佐藤栄作、溘然として 举世深悼す。(中略) 所謂長期安定政権を八年まで護立し、其の間、領土を恢復し、国交を修復し、防衛を堅強にす。就中、経済の繁栄見ること未曾有と稱せられる。晩には従一位に陞り、大勲位頸飾菊花大綬章、能留留平和賞を受く。至栄、大孝を作すと謂うべし。銘に曰く、拒まず、追わず、競わず、随わず、縁に従い、性に任せ、命を信じて、疑わず。昭和五十二年五月十五日 安岡正篤(28) 撰

安岡は佐藤の偉大な功績を称え、佐藤の名を取って「至栄、大孝を作す」と書いている。銘に曰く以下の文章は而学会のテキスト『宋名臣言行録』からの引用で、銘記した日付を「五月十五日」としたのも、佐藤内閣の大きな成果である沖繩返還を意識しての選定であった。

(五) 田中角栄と日中国交正常化

佐藤栄作の後に首相に就任した田中角栄は、安岡正篤との距離は決して近いものではなかった。それは佐藤の後継指名を受けた福田赳夫と田中が争ったことが原因というよりも、田中が首相になる以前に、安岡に対し距離を取っていたことの方が大きいようである。

田中は最終学歴が尋常高等小学校卒業というだけであって、庶民派宰相として、国民から絶大な人気を誇った。一九七二年二月のアメリカ大統領・ニクソンによる訪中後の九月、田中は日中国交正常化を実現すべく、その前段として自民党副総裁の椎名悦三郎を特使として台湾に派遣する。日中国交正常化は台湾との断交と表裏一体であり、事前説明が必要と考えたからである。

その時、椎名が持参した蒋介石宛の田中の親書作成に安岡が関与したという噂が流れた。しかし、安岡の秘書だった林繁之は、「これを信じない。証拠があると言う者もいるが、真実は形骸ではなくその衷心にあると思う」と、これを否定している。⁽²⁹⁾だが、その親書には安岡が関わっていたことが安岡の死後に判明する。外務省アジア局中国課長の橋本恕が中心となって起草され、実際に執筆したのは中国課の主席事務次官である小倉和夫であった。これに安岡が手を加えたのであった。⁽³⁰⁾

田中は外務大臣・大平正芳、官房長官・二階堂進を伴って北京入りし、日中国交正常化に向けた交渉を行った。最後に日台間の外交関係の終了発表を中国首相・周恩来から迫られた大平は、自分を信用するよう伝えると、周恩来は、これを受け入れ「言必信。行必果」と書いた色紙を大平に贈った。

日中交渉のクライマックスとなる田中と毛沢東との会談では、毛沢東から田中に『楚辞集註』が贈呈された。随行した外務省条約局長の高島益郎から、そのことについて報告を受けた安岡は啞然としたという。⁽³¹⁾『楚辞集註』は楚国の

詩人で宰相でもある屈原の作品を主とする詩集『楚辭』に南宋の儒家・朱熹が注釈を加えたものである。書物自体は貴重ではあったが、屈原は悲劇の人物で最後は汨羅の淵に投身自殺を遂げている。故に「そのような本、それは歴史的に貴重な本であっても、一国を代表する主席が、相手国の総理大臣に贈るめでたい本では無い。これは少し学問、常識があれば礼儀としてはならないし、田中さんも手放しで悦ぶことではない」として、安岡は憤慨したのであった。⁽³²⁾

加えて、大平宛ての色紙も同様で「言必信。行必果」は孔子の言葉ではあるが、これには続きがあり、「硜硜然たる小人なる哉」(けれども、それだけの人なら小石と同じ小人である)とあって、相手に敬意を払ったものではなかったのである。老獪な周恩来からすれば中国の膨大な人口に目が眩み浮足だった田中内閣を手玉に取ることは赤子の手を捻るようなものだったのだろう。

引き金はニクソン訪中であつたとは言え、日本だけが「バスに乗り遅れるな」とばかりに中国に接近し、先方に押しされ台湾との断交に踏み切つた。その後、歴史教科書問題、靖国問題、尖閣問題と、様々な外交問題が噴出していることから、この日中国交正常化は日本外交にとって成功体験であつたとは言い難い。

田中内閣は経済対策の失態もあって狂乱物価を招き、『文藝春秋』一九七三年一月特別号に田中の金権政治を暴いたジャーナリストの立花隆による「田中角栄研究——その金脈と人脈」、同じく田中の金脈問題と愛人問題を追及したルポライターの児玉隆也による「淋しき越山会の女王」という特集記事が掲載されたことがきっかけとなり総辞職した。田中の最後の会見では、優秀の美を飾らんとする官房長官の竹下登の配慮もあって、その草案が首相官邸より安岡のところへ届けられる。⁽³³⁾ 安岡は、これに「わが国の前途に想いをめぐらすとき、私は一夜、沛然として大地を打つ豪雨に心耳を澄ます思いでおります」と加筆したという。⁽³⁴⁾

(六) 水雲クラブで語った理想の宰相

一九七五年、河野洋平や藤波孝生を始めとする自民党文教族の若手議員を中心に発足した「論語会」がある。だが、河野が自民党を離脱して新自由クラブを結成したことから自然消滅となってしまった。この時、安岡は「一体、河野君は『論語』から何を学ぼうとしていたのかね、理解に苦しむよ」と、落ち着いて古典を真摯に学ぼうとしない河野へ苦言を呈した。⁽³⁵⁾

この論語会の経緯もあって安岡の周辺は政治家の勉強会にも慎重であったが、池田勇人内閣で官房副長官も務めた元内務官僚の細谷喜一の熱心な働きかけで若い政治家を対象とする勉強会が一九八〇年に発足した。江戸後期の上州安中の藩主・板倉勝尚と、幕府の大学頭・林述斎との問答集『水雲問答』がテキストとして使われたことから「水雲クラブ」と命名された。

この会には細田吉蔵、宮沢喜一、竹下登、山下元利、安倍晋太郎、渡辺美智雄、加藤紘一、林義郎といった次世代のニューリーダーたちが参加した。水雲クラブは二年近く計八回開かれ、論語会とは異なり誰一人中途で席を立つことはなかったという。その勉強会において、安倍が東洋の政治家としては誰を推されるかと質問した際に安岡は次のように答えた。

まず迷わず清の宰相曾國藩を挙げます。清王朝末期、太平天国（長髮族）の乱から、清王朝を救った哲人政治家です。わたしは常に、偉人には欠いてはならない要素は、至醇の情緒、すなわち至誠だと思っておりますが、彼はこの点において不滅の光を放っています。曾國藩のような尊い風格を持った人に、蜀の諸葛孔明、宋の司馬光、元の耶律素材がいますが、これらの人々も勝るとも劣らない人物です。⁽³⁶⁾

諸葛亮は蜀の劉備玄德を支えた名宰相、司馬光は歴史書『資治通鑑』の著者、耶律素材は元帝国の繁栄と拡大をチングス・ハンからフビライ・ハンに至る三代を支えた英傑である。曾国藩は中国清代末期に勃発した洪秀全による太平天国の乱を一六年かけて鎮圧し王朝の危機を救った政治家で、カント哲学にも通じる敬の徳を重んじ、その自省的な立ち居振舞いは、蔣介石も尊敬する軍人でもあったという。

曾国藩はもともと武人ではない。しかし祖国存亡の危機に直面して、武人となった。彼は諸將の統一に、夜も眠れないほど苦心した。しかし、決して権謀術数的なやり方はしなかった。劉邦や曹操、朱元璋らとちがって、統率に、自己を空しくして他を敬する、方法を取ったのです。さらに人材の登用を怠りませんでした。古今の政治家中、恐らく彼ほど人物を集め、人物を活かした人はあります(37)。

曾国藩は政務に忙殺される中でも、自らを省みる時間を作り、至誠の境地を求め常に内面的工夫を怠らなかつた。この曾国藩が登用し最も師の教えを体現しているのが、清朝を最後まで支えた政治家の李鴻章である。彼らの求道的な姿勢が太平天国の乱を鎮圧させ、清朝滅亡の危機を救ったと安岡は評価するのである。

(七) 而学会

佐藤栄作の首相政務秘書官であった楠田實は隔月で安岡正篤の下で勉強会「而学会」を開いた。而学会の語源は江戸時代の儒学者・佐藤一斎の『言志四録』からきている。この勉強会には後にセゾングループを築き上げた西武グルー

ブの堤清二を始めとする実業家に加え、経済評論家の伊藤肇、作家の江藤淳、建築家の黒川紀章と錚々たる文化人も参加していた。

その楠田の紹介によって而学会に参加した佐々淳行も安岡を敬愛する一人であった。佐々は初代内閣安全保障室長として日本国内の危機管理行政に携わってきた人物である。その時に使用されたテキストが『宋名臣言行録』であった。明治天皇も座右の書とした東洋古典の名著である。学生運動の激しい時代に、その最前線にいた佐々からすれば、古典の教えが現実の厳しい行政問題に適応できるのか懐疑的だったが、「宋の名將の言行に託して日本の現実を語られるその話は、非常に説得力をもってわれわれに追ってくる」ものだったらしい。⁽³⁸⁾

東大安田講堂事件、あさま山荘事件と、過激化する学生運動の対応に当たってきた佐々にとっても、この勉強会の内容は現実問題に転用可能な生きた学問だったのである。そして楠田は安岡について「佐藤内閣についていえば、政治哲学ないし為政者の道徳的なあり方について、わが国の東洋学の泰斗、安岡正篤のご指導を仰ぐことができて、大禍なきを期することをできたことを特記しておかなければならない。安岡先生は池田、佐藤両総理の師傅ともいふべき人であり、その学風をしたう人は全国的にも数多くある」と評価している。⁽³⁹⁾

(八) 漢江の奇跡

様々な勉強会において安岡正篤は実業家との学問を通じた交流を重ねていったが、その人脈を活かして彼らの窮地を救うこともあった。安岡を囲む財界人グループ「不忘会」に参加した三井不動産会長の江戸英雄は安岡の死後、このように語っている。

ちよつと問題があつて、先生に物を頼んだことがあるんです。蔣介石に頼むことがあつて、先生にお願いしたら、本当に私が頼んだ通りにやってくれました。だから私はいつも「安岡先生は会社の恩人だぞ」といつているんです。⁽⁴⁾

これは一九五〇年代半ばのことである。当時の三井不動産が台湾において、どのような「問題」が生じたのかは定かでないが、その解決に安岡が尽力したことは、蔣介石との信頼関係を考えれば十分にあり得る。もちろん安岡は、この件に関して一切、口にしていない。それが例え歴史に残る大業であつたとしても、安岡は全く意に介さなかつた。その際たるものが「漢江の奇跡」と呼ばれた韓国の経済発展に安岡が関わつていたことである。

漢江の奇跡とは一九六〇年代後半頃から始まる韓国の急激な経済発展のことであり、この劇的な経済成長の起爆剤となつたのが浦項総合製鉄であつた。大統領・朴正熙の号令により、当時、陸軍少将であつた朴泰俊は、韓国の工業化を目指し、製鉄所建設に着手した。だが、欧米からの投資を断られたため、製鉄所建設は失敗に終わるかに見えた。ところが一九六九年、朴泰俊が以前から親交のあつた安岡に相談を持ちかけたことで一筋の光が見え始める。朴泰俊が苦衷を吐露するや、安岡は、その場で後に新日鉄会長となる八幡製鉄社長の稲山嘉寛に電話を入れた。⁽⁵⁾さらに安岡は当時の首相・佐藤栄作を始め政財界の大物たちと朴泰俊との間を取り持つたという。これがきっかけとなつて韓国での製鉄所建設が始まつたのである。

この朴泰俊を安岡に紹介したのが、後に実業家として日韓民間交流に尽力することになる朴哲彦である。朴哲彦は一九四八年に二二歳で来日、アメリカ極東軍総司令部の軍属として軍事資料の翻訳作業員として雇われていた際に安岡と出会つた。その後、対日国交正常化のため、韓国政府は朴哲彦を通して安岡のところに密使を派遣し、政界工作

を懇願している。当時の国務総理・張勉は「安岡先生が戦後に連合国側から糾弾されなかったのというのは、どんな理由だったからなのか」と、安岡が信頼に足る人物かを訝しんだという。⁽²⁾

そのような経緯もあって朴哲彦は朴泰俊を安岡に引き合わせたのである。朴泰俊の国士然たる人間性に深い共鳴を覚えた安岡は、その要請に応えようと、政財界要人への説得を行ったのである。こうして日本側にとっては難しい条件であった浦項総合製鉄への技術供与、さらに対日請求権資金の一部転用などが決まったのであった。

四 「万世の為に太平を開く」

(一) 終戦の詔書

一九四五年八月一五日、この日は昭和天皇が国民に向けて、「終戦の詔書」を読み上げる玉音放送が流れ、連合国に対する降伏が発表された。その詔書案の刪修を行ったのが、漢学者の川田瑞穂と安岡正篤であった。発表前日の一日、日本政府が作った原案に安岡が数カ所の修正を入れた。

ポツダム宣言受け入れは、万策尽きて降伏するのではなく、天地の真理に照らして、それが最善であるから受け入れるのである。故に詔書に「萬世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」との一文を加えた。これは中国宗王朝時代の思想家・張横渠の言葉「天地の為に心を立つ、生民の為に命を立つ、往聖の為に絶学を継ぐ、萬世の為に太平を開く」に由来する。「萬世」(万世)とは、狭義の意味では永久に続く同一系統という意味であるが、それは皇室に限ったことではない。皇室を含めた日本及び世界全体の「太平」(平和)を望むという願いが込め、この言葉が引用されたのである。さらに安岡は詔書案に「時運ノ趨ク所」とあるのを「義命ノ存スル所」に訂正した。義命とは『春秋左氏伝』の「信

を以て義を行い、義を以て命を為す」から取ったものである。

敗戦したとは言え、この詔書の加筆に携わったことは名誉なはずである。だが、安岡にとっては痛恨の極みであった。なぜなら発表された詔書は安岡の意図とは異なる形で修正されてしまったからである。安岡の加筆によってできた箇所にある「義命」が閣議において意味が分かり難いという理由で却下され、原案通りの「時運ノ赴ク所」に戻されたのであった。これより、最終的に玉音放送では「時運ノ趨ク所、堪へ難キヲ堪へ忍ビ難キヲ忍ビ、以テ萬世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」と流れたのである。

安岡は、しばらくの間、詔書作成に携わったことを公言しなかった。安岡が初めて自らの重い口を開いたのは、詔書の発表から一七年後の一九六二年のことである。この年の一月一七日、池田勇人内閣において郵政大臣となった迫水久常の依頼で、郵政省に向いて講演した際、迫水が詔書の作成過程において、安岡が重要な役割を担っていたことを、聴衆の前に明らかにしたのである。これを受けて安岡は、「詔勅の話は原則としてせぬことにしているが、思いがけなく大臣が触れたので誤解のないよう注釈を致します」と述べた上で、「義命ノ存スル所」が「時運ノ趨ク所」に直されたとし、最後にこのことを「終生の恨事」と結んだとい⁴⁹う。

では、この「時運ノ趨ク所」の何が不満だったのか。一九七一年一月、愛知県師友協会主催で行われた講演で、その理由を次のように明かしている。

日本の開關以来初めての思いもかけぬ、あるいはとんでもない悲運に遭遇されて、私は沈思熟考いたしました、欠く可らざる二点、細かいことは別としまして、絶対に必要なる二点に気がつきました。その一つは、いかなる国の敗戦、降伏の場合にも未だかつてない、西洋流に言えば黄金の文字、日本の天皇なればこそという権威のあ

る言葉をどうしても選びたいということ。他の一つは、これは力尽きて仕方なく降伏するというのではなく、道義の命ずるところ、良心の至上命令に従ってする。損得の問題ではないということ、それが日本精神の眼目であるということ。この二点だけはどうしても逸してはならぬと考えまして。⁽⁴⁾

義命とは国家の大義名分より遙かに重いものである。普遍的な道德觀念に照らし合わせ内省すると、戦局の有利不利に関わらず、戦争は止めた方がいい。だが、それが時運であれば、敗戦濃厚な状況を鑑み、時局の成り行き上、致し方なく戦争を止めるといふ「ご都合主義」になってしまうからである。降伏を勧告された敗戦国らしからぬ文章を入れたのも安岡なりの理由があった。

大東亜戦争は元々、盧溝橋事件に端を発し日本は戦いを有利に進めながらも、泥沼化して戦線が拡大の一途を続けた。どのようにして戦争を終わらせるかという出口が見えないまま、英米介入を招いた性格を有するものである。だからこそ交戦相手である中華民国の先哲の章句を用い、卑屈になるのではなく降伏を堂々と受諾することが、今後の東アジアの安定の平和と安定に直結すると信じていたのである。しかし、最終的に詔書には時の日本政府によって「時運」が選ばれることとなったのであった。

(二) 東洋宰相論

安岡は陽明学者として称されることが多いが、それは安岡の思想を言い表しているとは言い難い。儒教学者にありがちな朱子学派や陽明学派の論争にも与しない。右翼思想家と見做されるような何か特定の考え方に偏することもない。安岡は若い頃から一つの専門分野に縛られることを嫌い、儒教、道教、国学、仏教、キリスト教、ギリシア哲学

などの様々な古典、最新の生理学や農学など文系・理系の区別関係なく心の赴くまま関心のあるテーマの書物を渉猟した。その中でも安岡が頻繁に引用したのが、張横渠の言葉「天地の為に心を立つ、生民の為に命を立つ、往聖の為に絶学を継ぐ、万世の為に太平を開く」である。

「天地の為に心を立つ」は、人間が独自に進化して心を持ったのではなく、古い東洋思想の概念でもある天地から人間の心というものが開いたのであるから、天地万物を一体の物とみなす。その天地と一体である人間から発達した宗教、道徳でさえも、突き詰めれば全てが一つであり、宗派や学派、専門分野の差異は問題ではなかった。田中角栄へ送った「一夜、沛然として大地を打つ豪雨に心耳を澄ます思い」も、天地（自然）と当時の田中の心境を一体と見なすからこそその言葉でもある。

その次の言葉が「生民の為に命を立つ」である。命とは生物学的な命ではなく、道徳的精神を意味し、立命の命でもある。それは正に『春秋左氏伝』の「信を以て義を行い、義を以て命を為す」である。それは利己的で独善的な革命思想でもなければ、権益を拡大することを優先するような霸道政治でもない。儒教の経書である『大学』の「民に親しむに在り」という伝統的な孔子の思想に基づいたものであり、相手（他国）を慮る利他的で協調的な態度である。その態度は、戦前の日本の霸道政治とは大きく異なる。

安岡も少なからず関わった昭和維新の帰結は、日本の無条件降伏という最悪の形で幕を閉じた。昭和の一連の戦争に関して安岡は以下のように総括する。

満州事変の思わざる成功によって北京にいる者、天津にいる者、上海にいる者、その他アジア各地にいる者、また日本内地にいたそれらの同志者、そういう国民の血の多い人々に、当時いわゆる建国病というものが蔓

延した。「功名富貴に唾して取るべし」という野心が日本の朝野に勃興した。この野心が大いに国を誤ったのであります。日本自体の革新運動も傾向を強くした。そして歴史的・伝統的な深い人間学、正しい節義、そういうものを失って、近代の非常に非人間的なイデオロギーと、それに粉飾、カモフラージュされた野心とが大荒れに荒れたということが、（昭和敗戦の）大破滅を招いた一番の大きな原因であります。⁽⁴⁾

安岡は満州事変や大東亜戦争に対し、一貫して否定的な立場を取っていた。どうすれば戦争を回避できるか、政治家や軍人に働きかけながらも人材育成に心血を注いできた。

江戸幕府は大平の世を作るための手段として朱子学を用いた。そして徳川吉宗、松平定信たちの様々な改革によって学政一致の気風が全国諸藩に広まり、身分に関わらず学問によって習得した能力を生かし異例の人材登用が目立つようになった。地方財政の悪化、農村の荒廃を救ったのは、郷土から学問によって身を立てた先人たちである。その先人の学問を郷学という。

備前岡山藩の熊沢蕃山と米沢藩の上杉鷹山は、藩財政を立て直し、郷土の学問振興に尽力している。全国各地の農村復興に尽力した小田原藩の二宮尊徳と、備前松山藩の財政再建を果たし主君の板倉勝静を老中まで出世させた山田方谷の二人は、菜種油の売買で生計を立てる農民出身であった。

他にも佐藤一斎や橋本佐内、横井小楠、吉田松陰など数多くの人物が、儒教や仏教、神道などの東洋文化及び日本の伝統精神に基づく郷学が、彼ら自身の精神を陶冶してきたのである。その郷学こそ、安岡が大阪時代に学んだ古典教育なのである。

この精神教育の欠如が、昭和維新の革命家、満州事変や中国大陸へ過剰に進出しようとする野心的な人々を御する

ことができなかつたと安岡は述べた。それは「往聖の為に絶学を継ぐ」ことを、明治以降の日本が怠っていたのである。

明治天皇も精神教育について同様の危惧を抱いていた。東京帝国大学を見学した際、形だけの修身教育に危機感を感じ、側近の元田永孚に以下のように漏らした。

當世復古ノ功臣内閣ニ入テ政ヲ執ルト雖モ、永久ヲ保スベカラズ。之ヲ繼グノ相材ヲ育成セザル可カラズ。今大學ノ教科和漢修身ノ科有ルモ無キヤモ知ラズ。¹⁶⁾

明治天皇は西郷隆盛を慕い、旧幕臣の山岡鉄舟から士族が学んできた教育を受けたことから分かるように、精神的な道徳教育を重要視してきた。その明治天皇からすれば国内で最も優秀な生徒が集まる東京帝国大学の教育でさえも、人格を養う教育には映らなかつた。古典や漢籍を授業で取り扱っていたとしても、通り一遍の解釈の学問に過ぎず、この東京帝国大学から、将来の日本を支える人材が生まれるのかと強い危機感を抱いたのである。

当時は幕末から明治を生き抜き、古典教育を受けた元勳世代が政治の中樞にいた。彼らが第一線から退いた頃には、明治天皇が危惧した通り、日本にテロリズムや革命の嵐が吹き荒れ、政財界のリーダーたちが次々と凶弾に倒れ歯止めが効かなくなつてしまった。例え迂遠なようであっても、こういった問題に対抗するために安岡が導き出した答えが、修養教育であり、聖賢の学を継承していく「往聖の為に絶学を継ぐ」である。

晩年、政治の倫理化活動に時間を費やした後藤新平も、「政治の倫理かという思想は決して新しいものではなく、そのような主義思想は西洋においては、古くはギリシアの哲人プラトン、アリストテレスに発し、わが東洋においては、

王道政治といい、政は正なりと喝破した孔子の言葉にあるように、その由来は非常に遼遠なものである。真理とは常に古く、しかも常に新しいものである」と述べ、道徳が政治の基盤であり、その欠如が破滅を招くと警鐘を鳴らし続けた。聖徳太子の一七条憲法、北条泰時の御成敗式目、徳川吉宗の享保の改革など、優れた政治改革は道徳を基盤に行われたのである。そして最後の言葉である「万世の為に太平を開く」に繋がるのである。

安岡が「終戦の詔書」に「万世の為に太平を開く」を選んだのは、決して仰々しい文句だから選んだのではない。国の将来を決めるのは「時運」という相対的な力関係で決まる風任せのようなものではなく、「義命」という普遍的で絶対的な道徳を基盤としなければならなかったという確信があったからである。だからこそ、敗戦後の日本のあるべき姿を「万世の為に太平を開く」という張横渠の四言教に見出した。一時的な平和ではなく、永久的に続いていく平和の為に、歴代の首相に政策ではなく、東洋の歴史や文化、東洋の道徳精神に基づいた宰相としての姿勢を、古典を通じて指南し続けたのである。

おわりに

安岡正篤については、未だ明らかにされていない部分も多く、すでに世に出ている安岡の著作、講演録の内容に関しても、十分な検証が行われておらず、その思想・哲学が完全に理解されているとは言い難い。安岡の思想・哲学は国学や儒教思想だけでなく、ドイツ哲学や仏教思想、生理学にまで及ぶ。安岡は政治・歴史・社会問題を語る際、専門的見地からの分析を飛び越え、時には無関係にさえ思える体の生理機能を例に出し縦横無尽に論じた。

安岡からすれば古今東西の歴史や哲学、文系・理系の学問の枠組みでさえ狭過ぎるのである。安岡の広範で深遠な

知性を紐解くには、筆者自身の研鑽も今後の課題である。

戦前の思想的態度にしても、既存のエリートを敵視し革命に血眼になる右翼や左翼、大陸に野心を持つ陸軍軍人とは大きく異なっている。もちろん、戦前は言われなき批判に晒されることも多かった。彼らを敵に回してでも命懸けで為すべきこと為す。全ては「万世の為に太平を開く」ためであった。

現代の政治家が、どれほど古典を学び体得しているのか。そもそも現代社会では張横渠や安岡に限らず、先人の教えを尊ぶ気風すら感じられない。洋の東西を問わず様々な古典に裏打ちされた幅広い識見と学殖、それによって育まれた確固たる思想・哲学を持った宰相の登場を期待したい。

※本稿は二〇二二年度に拓殖大学大学院地方政治行政研究科へ提出した修士論文「戦後日本政治史の中の安岡正篤——『宰相の指導者』としての側面を中心に」の一部を大幅に加筆・修正したものである。

注

- (1) 『週刊現代』編『週刊現代プレミアム』二〇二〇Vol.2ビジュアル版「昭和の怪物——戦後政財界のドンたち」(講談社、二〇二〇年)、一一一頁。
- (2) 小田部雄次「天皇制イデオロギーと親英米派の系譜——安岡正篤を中心に」『史苑』第四三卷第一号(立教大学史学会、一九八五年)、二六頁。
- (3) 「特集——安岡正篤」『致知』第一〇四号(致知出版社、一九八四年)、二五頁。
- (4) 安岡正篤先生年譜編纂委員会「安岡正篤先生年譜」(郷学研修所・安岡正篤記念館、一九九七年)、二二頁。
- (5) 塩田潮『昭和の教祖——安岡正篤』文庫版(文藝春秋、一九九四年)、一一一頁。
- (6) 神渡良平『宰相の指導者——安岡正篤の世界』(講談社、二〇〇二年)、二〇三—二〇四頁。

- (7) 新井正明『安岡正篤先生に学んだ私の人生』(致知出版社、二〇〇四年)、二三頁。
- (8) 老川祥一『終戦詔書と日本政治——義命と時運の相剋』(同文館出版、二〇一五年)、一六〇頁。
- (9) 神渡良平『安岡正篤の世界——先賢の風を慕う』(同信社、一九九一年)、二四七—二四八頁。
- (10) 『朝日新聞』一九八三年二月一四日朝刊。
- (11) 『毎日新聞』一九八三年二月一四日朝刊。
- (12) 林繁之『安岡正篤先生動情記』(プレジデント社、一九八八年)、一四五頁。
- (13) 安岡正篤『人物を創る』(プレジデント社、一九八八年)、二二六—二八頁。
- (14) 同上書、二九—三〇頁。
- (15) 林繁之、前掲書、一八頁。
- (16) 同右書、二〇頁。
- (17) 同上書、二六頁。
- (18) 同上書、二四頁。
- (19) 同上書、二六頁。
- (20) 神渡良平『安岡正篤の世界——先賢の風を慕う』、前掲書、六〇頁。
- (21) 同上書、一〇三頁。
- (22) 大平正芳記念財団編『大平正芳とその政治——再論』(PHPエディターズグループ、二〇二三年)、二二六頁。
- (23) 神渡良平『安岡正篤の世界——先賢の風を慕う』、前掲書、一〇三頁。
- (24) 新井正明『安岡正篤とその弟子』(竹井出版、一九八四年)、一四九—一五〇頁。
- (25) 致知出版編『安岡正篤——人と思想』(致知出版、一九九八年)、一一五頁。
- (26) 新井正明、前掲書、一二三頁。
- (27) 致知出版編、前掲書、一一五頁。
- (28) 新井正明、前掲書、一二二頁。

- (29) 林繁之、前掲書、八五頁。
- (30) 丹羽文生『日中国交正常化と台湾——焦燥と苦悶の政治決断』（北樹出版、二〇二二年）、一七四頁。
- (31) 林繁之、前掲書、八五頁。
- (32) 林繁之『安岡正篤先生人間像——随縁逍遥の記』（エモーチモ21）、四五頁。
- (33) 林繁之『安岡正篤先生動情記』、前掲書、九二頁。
- (34) 中野士郎『田中政権・886日』（行政問題研究所出版局、一九八二年）、三七四頁。
- (35) 神渡良平『安岡正篤の世界——先賢の風を慕う』、前掲書、八八頁。
- (36) 同右。
- (37) 同右。
- (38) 致知出版編、前掲書、一三八頁。
- (39) 楠田實『首席秘書官——佐藤総理との10年間』（文藝春秋、一九七五年）、五一六頁。
- (40) 「盟友——安岡正篤を偲ぶ」『致知』第一〇四号（致知出版社、一九八四年）、七頁。
- (41) キム・ヒヨスン「パク・テジュンと水曜デモに見た韓・日関係」<https://japanhancor.kr/art/PRINT/10015.html>（11011111年九月一四日閲覧）。
- (42) 朴哲彦著、水沼啓子訳『日韓交流——陰で支えた男』（産経新聞出版、二〇〇五年）、一六八頁。
- (43) 安岡正篤先生年譜編纂委員会、前掲書、一五〇頁。
- (44) 安岡正篤『運命を創る』（プレジデント社、一九八五年）、七〇頁。
- (45) 安岡正篤『知命と立命』（プレジデント社、一九九一年）、三二六頁。
- (46) 元田永孚『聖諭記』（大東文化協會、一九三四年）、三三頁。
- (47) 楠木賢道『後藤新平——国家とは何か』（二〇二二年、藤原書店）、五〇頁。